

後藤竜二の語りについて

荒木せいお

八〇年代の終わりごろ、わたしは「季節風」というグループで行われた研究会の場で『少年たち』(82)についてのレポートを報告した。報告の中でわたしは、出版されたばかりの『14歳—Fight』(88)のことも若干触れながら『少年たち』という作品の可能性を述べた。少なくとも「季節風」の中では『14歳—Fight』についての評価は高く、そんななかであえて『少年たち』を論じるわたしの報告に、その場にいた人の多くはとまどっていたのかもしれない。作者の後藤さんもその場にはいたが、とくべつに肯定も否定もなかった。しかし、わたしの報告の内容が気に入ってないことだけは表情からうかがうことができた。報告をする前から後藤さんから評価されることはないだろうということは分かっていた。『少年たち』『14歳—Fight』はともに中学生の抱える問題が取り上げられているが、そこに描かれているものは『14歳—Fight』のほうが濃密であり、緊迫感がある。そして何より、『少年たち』のほうには抒情的な甘さがある。おそらく後藤さんはその甘さを『14歳—Fight』で克服しようとしたのであろう。そうい

うことは認めたくなくてそれでも『少年たち』のなかに物語の可能性を感じたのだが、ことばたらずのため誰の心にも引くかかるとなくそのまま消えてしまった。今回、ここで論じようとしている内容は、そのときの報告がもとなっている。二〇年以上も前のことを思い返しながら後藤竜二という作家について考えてみたい。

*

『少年たち』は主人公の志木悠が白紙答案を出す場面から始まる。試験の直前の爆竹騒ぎで犯人扱いされ、その抗議としての白紙答案だったが、もう一人沖田も白紙答案を出しており、それを見つけたエビセン(体育教師)に詰問される。沖田はエビセンの手の甲に鉛筆を突き刺し、逃げていく。結局、悠の抗議は宙に浮いたかっこうとなり、成績表事件のときと同じと感ずる。成績表事件とは、一年前、トンビが毎週の試験の結果をトップからびりまで廊下に貼り出したことに対する抗議で、悠と和平が学級の代表としてトンビに廃止を求めていく。しかし、まったく相手にさ